

---

# 日本侵略

Q1923

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

日本侵略

### 【Nコード】

N6847Y

### 【作者名】

Q1923

### 【あらすじ】

ある日、突然東京に現れた謎の軍隊。  
市民を無差別に攻撃してゆく。  
一体誰が、何のために……

## 日本へ

「これはドラマではありませんッ、今実際に起こっていることです。とつ東京湾岸地域に謎の軍隊が出没、無差別攻撃を開始した模様。これにともなつて政府は国家緊急事態法の適用により交戦を開始しました。」

ちょうど俺は、商店街にLED電球を買いに出かけていた。

ここは都心からだいぶ離れた田舎町。

ん、何だこの騒ぎは、街中の人がなんだか様子がおかしい。

しばらく歩くと電気屋の前に人が集まっていた。

「オイオイオイ、マジかよ、とうとう、にっ日本も終わりなのか」

なに？今なんて言ったんだ日本が終わるだと？

透かさず俺は、人をかき分け、なんとかテレビの前に出ることができた。

すると、画面いっぱいに広がる戦車や軍隊。

しばらくボーとしていると、あたり一面に鳴り響くサイレン。

「緊急事態発生、国家緊急事態法により安全処置が行われました。当地域の住人は速やかに帰宅してください。」

しばらくシーンと静まり帰ったかと思うと、悲鳴が。

「キヤー、この街にもくつくるああああああお終いだあああ  
あ」

これを機に荒れ狂う人が次第に増えてゆく。

なっなんだよ、俺の人生まだまだこれからだっちゅーのによお。  
最悪だ。

あ、マズイ、今日は幼稚園が休みだった。友里ゆりが家にいるんだ。  
おまけに真由美まゆみ今日出張だったんだ。

「皆さん、慌てずに、ほらその君、落ち着きなさい」

警察のお出ました。

俺は、急いで家へ向かった。

そういえば半年前妙な事があつたな・・・

「早く、ゆくり、起きなさい、あなたもよ、ほら」

明るくしつかりものの妻、真由美は日律編集社にちりつに働く記者だ。

「ああ、ゴメン」

「また、仕事遅くまでしてたのね、最近多いわよ」

「そっそうかな」

俺は、雪宮ゆきみやグローバルセキュリティ社に働くエンジニアだ。

俺は、支度をしていると、ふとテレビに目が行った。

いつも見ているニュース番組、その時、急に画面が砂嵐に変わった。

「日本政府諸君。こんにちは」

なっなんだこれはッ。

画面は砂嵐のまま音声だけが聞こえる。

「我々は、我々の夢の実現のためEU加盟国を侵略した」

「ここに、我々の我々による夢の為に建国宣言をする」

「我々は現在、ロシア政府と宣戦布告宣言をした」

「そしつてしじつっ・・・」

徐々に声が遠くなってゆくそしていつものニュースキャスターがいるニュース画面に戻った。

「只今の放送は、電波ジャックによる放送だと思われます。現在、詳しい調査をしていますので分かり次第お伝えいたします」

「なっ何なの今のは」

「サツさあ、俺にも分からん」

「すなあらしのオバケだよ」

「ハッハッハ、そうだな、お前は可愛いやつだな」

「あつもうこんな時間か、行ってくるわ」

「行ってらっしゃい」

「行ってらっしゃい」

俺は自転車に乗って30分ほどでつくグローバルセキュリティ社にいった。

「おはよう御座います」

エントランスに経つといつも女性の女性が笑顔で挨拶した。

「お、おはよう」

俺の仕事場は12階にあるインターネットセキュリティ部だ。ちなみにこのビルは全部で30階ある。

エレベーターから降り、持ち場につくと、早速来た。

「あつ来たきた、雪宮、テレビ、見た？」

人懐っこく聞いてきたのは、俺の同僚の篤志<sup>あつし</sup>。

「あれ、何だったの？」

「俺に聞くなよ、分かるわけないよ」

「そうだよな、ゴメンゴメン」

そうだッあれだ、あの奇妙な電波ジャックだ、もしかしたら連中が来たのか？

そんなことはどうでもいい、早く家に帰らなければ。

「おーい、友里〜今帰ったぞ〜」

「パパ〜」

いきよいよく抱きついてきた。

「ハツハツハ、大丈夫か？」

「あなた、心配したのよ、電話も繋がらなくて」

「あれ、真由美、帰ってたのか」

「ええ、忘れ物しちゃって取りに来たらこの有様よ、もう出張なんて行つてられないわよ」

「そうだな、とにかくみんな無事でよかった」

よかったみんな無事で本当に・・・

しかし、まだこれは始まりに過ぎなかったのだ。

「依然としてこの謎の軍隊は勢力を拡大しつつあり、このままでは東京が侵略されてしまうおそれがあるとのことです。政府は直ちに中枢機関を郊外へ移すと共に近隣諸国へ協力願いを発行しました。」

街中に行き交う戦闘車両、輸送車両そして戦闘機、乗っている兵士はかなり緊張しているようだ。

「一体どうなっちゃうのかしら」

「こわいよ〜ママ、パパ〜」

「大丈夫、大丈夫、ほら、兵隊さんがこんなにいるんだ、大丈夫だよ」

「うん」

なんとか落ち着かせることはできた。

これからどうしようか、そしてどうなるのだろうか……

続く。

## 最前線は今

激しい轟音が轟く東京、ここは最前線の東京軍事司令部。

「何だって、もう一度言ってくれ」

司令官の仰木おおきは報告に来た兵に向かって叫ぶ。

「最前線のアメリカ軍が全滅した模様、間もなく敵軍、第二防衛ラインに到達します」

轟音に負けない大きさを言った。

「クソっ、アメリカがやられたとお、直ちに増援を派遣せよ」

「了解、直ちに」

「あつちよつと待て、偵察部隊はどうなった？」

すると、兵は首を振った。

「おいっこれで何回目だこん畜生ッ、また全滅かよ」

謎の軍隊が攻めて交戦を開始した時から各部隊との無線による遠距離通信がとれないでいた。

したがって今まで有線接続でしかも音声のみで各部隊と連絡していたのだ。

今回、派遣された偵察部隊の任務は敵の写真撮影及び情報収集であ

った。

「やはり偵察機はダメでしたか」

作戦本部長の上野宮は残念な顔で仰木に言う。かみのみや

「ああ、地上部隊でもダメだったんだ、今回は予定された帰還日を大きく上回っているから絶望的だよ」

「でも可能性はありますよ」

上野宮はにこやかに言う。

「んな馬鹿な言葉ありますか？」

「可能性を信じましょう」

「だといいですな」

こうして二人はその場をあとにした。

### 成田国際空港

軍が戦闘機用として利用することになったこの空港。24時間体制で出撃する戦闘機をサポートしていた。

「おい、これを見てくれ」  
管制官が叫んだ。

「オイオイ、どうした？疲労でおかしくなったか？」  
冗談交じりで言いながら近づく。

「いいから見てくれ」

「ん？これってまさか戦闘機か」

「まさかあり得るわけないだろ、もう12時だぜ、こんな真っ暗のなか来るわけねえよ」

とその時管制塔の無線が鳴る。

「こ、ち・・・ら・・・空軍・・・て・・・い・・・」

雑音と共に声が聞こえる。

「こちら成田国際空港、無線の周波数がずれている、コードを合わせる」

すると直ぐにクリアな音声に変わった。

「周波数確認。こちらは空軍第9偵察部隊」

「マジかよ」

「すげー」

管制塔内ではすでに盛り上がっていた。

「敵の攻撃により被害甚大、7機中6機墜落、当機はコンピュータルームに多大なダメージを追った模様。第5操作パネルが言うことをきかない、これより緊急着陸体制に移行する」

「了解、幸運を祈る」

一気に管制塔は静まり返った。

目の前に巨大な機体が入ってくる。

「マズイ、速度が速過ぎるぞ」

急いで無線に呼びかけたがもう手遅れだった。

耳を痛めるような爆音と共に炎の渦が滑走路一面に立ち込めていた。

「そうか・・・墜落したか」

司令官の仰木は愕然としていた。

「はい・・・先ほど成田からそのような連絡が」

「分かった、下がっていいぞ」

「はぁー」

仰木は長いため息を吐いた。

翌日の朝、ニュースがやってきた。

「しし司令官、墜落した偵察機から画像データやその他もろもろのデータの復元が完了しましたッ」

「ほ、本当か」

「ハイッ」

こうして謎の軍隊の詳細を知る術が見つかった。

この拡大し続ける軍に勝つ術はあるのか？

続く。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6847y/>

---

日本侵略

2011年11月25日21時52分発行